終・十段跳びのなにが悪い！

夜太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終・十段跳びのなにが悪い！

【Ｎコード】
Ｎ３４３９Ｚ

【作者名】
夜太郎

【あらすじ】
『十段跳びのなにが悪い！』の続きのお話です。

（前書き）

『十段跳びのなにが悪い！』という短編の続きのお話です。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ００２５ｗ／
→こちら。

――俺は……。
亮一は直立不動のまま、拳を握る。
容姿端麗、文武両道、加えて大富豪の家の令嬢。そんな女の子が自分を好きと言ってくれている。正直、揺らぐ気持ちはある。
「亮一！　おとなしく捕まってくれ！　好きなゲームソフトを買ってもらえるんだ！」
正面から迫る学友たち。彼らは明日香がくれる『ご褒美』に釣られて、目をギラギラと輝かせている。
彼らに捕まれば、明日香の前に連れて行かれて、一緒に昼飯を食うことになるだろう。そこで答えを出す選択肢もある。
だが――。
「みんなごめん！」
亮一は伸びる手を軽やかに避けて、廊下を駆け出した。
「美雪が泣いてたんだ！」
幼馴染を放っておけなかった。
彼女の泣き顔が頭にこべりついて離れない。
昔っから、泣き虫の癖に気を遣って強がる子だった。他人のために自分を捨てるのを、平然とやってしまう。だから、少しでも目を離すといつの間にか落ち込んで泣いていた。慰めるのは、亮一の役目だった。
「待て！　亮一！」
突き当たりを曲がり、跳ぶ勢いで階段を下りる。
「向井はどこだ！？」
階下から声。
――みんなして目が眩んで！
心のなかで怒鳴りながら廊下へ出る。三階は三年と二年の教室が並ぶ階だ。流石にここまでは浸食されておらず、亮一は廊下を突っ

切っていく。
――美雪……どこ行ったんだ？
反対側の廊下を下りて、踊り場の窓からグラウンドを覗く。
「いた！」
グラウンドを抜け、校門へ向かって走っていく女子生徒の後ろ姿が見えた。
こんな時間に早退なんてするのは病気の生徒か素行の悪い生徒だ。だが、あの後ろ姿は健康そのもの。走って脱出する不良もいないだろう。
「あのお馬鹿！」
急いであとを追う。間に合うかどうかなんて思案をする余裕は、亮一にはない。ただ美雪と話す。泣いてたら、泣き止ます。それだけだ。
一階へ下りた。
玄関は廊下の中間地点にある。壁に背をつけ、スパイさながら覗くと、やはり玄関には生徒たちの姿がある。数は六の男女だ。亮一が外へ出ないために防衛しているのである。
――こうなったら上履きで……。
思っていると、ポケットに入れた携帯電話が震えた。取り出してみると、生徒会長、勇作の名前が表示されている。
「もしもし？　なんですか、こんなときに……」
「こんなときだからだ」
「え？」
「裏サイトが凄いことになってるぞ。お前の目撃情報の共有に使われてる。なるほど、メールよか楽ちんだな」
「そんなこと言うために電話したんですか？」
「これは前置きだ」勇作はくつくつと喉を鳴らしながら、言う。「選んだみたいだな、選択肢。捜索部隊が駆け回ってることは、渡瀬美雪を選んだのか？」
亮一はこの問いに逡巡しながら「はい」と答えた。すると、電話

口で勇作が嬉しそうに「そうか」と呟く。
「やっぱり王道ルートだよな、幼馴染は」
「あの……もう切りますよ？　美雪を追いたいですし」
「焦るなよ。上履きで行っても格好がつかないだろう？」
その台詞から察するに、玄関を占領していることも裏サイトの掲示板に書かれているのだろう。亮一は周囲に気を配りながら、生返事をする。
「まあ見てろ」
勇作が言ったと同時に変化が起こった。玄関を防衛していた生徒たちが、携帯電話の画面を見ながら、慌て始めたのである。
そして彼らは、亮一がいる階段とは逆方向の階段へ向かっていってしまった。当然、玄関は空っぽだ。
「会長、一体なにをしたんですか？」
玄関へ走りながら、訊ねる。勇作は愉快気な声で「簡単だよ」と説明する。
「裏サイトが情報源になってるなら、そこを改竄すればいい。掲示板を閉鎖して、トップページに向井亮一は捕まり、連行されたと書いたんだよ」
「そんなこと……犯罪じゃないんですか？」
「馬鹿言え。これは俺が作ったサイトだ」
「……恐れ入りました」
「それでよろしい」
もふんという鼻息が伝わる。
亮一は靴を履き換えながら、
「でも、どうしてこんなことしてくれるんです？」
と訊いた。
「俺はハッピーエンドが好きなのさ」
じゃあな、と電話が切られる。亮一は電話に向かって「ありがとうございます」と言い、駆け出す。
全身全霊、全力全快。とにかく全速力で美雪を追った。

一方、教室の自席で重箱を抱える時倉明日香は、机の上に置かれた携帯電話の液晶画面を睨んでいた。
彼女からの『ご褒美』のために必死扱いて亮一を捕らえようとしていた生徒たちは、眉を顰めてご主人様の顔色を窺っている。
明日香が睨む先には、裏サイトのトップページがある。亮一が捕まり、連行されたという文字は消え、『愛しの王子様は、悪い姫様から逃げ出しました』と、控えめなフォントで書かれてあった。
「亮一は逃げたか……」
彼女はゆっくり立ち上がると、重箱を脇にいた男子に渡す。
「私は早退する……」
そして、ふらふらと弱々しい足取りで教室を出ていった。
取り巻きの生徒たちは、追うことはしなかった。褒美を貰えないのなら、せめて弁当を食おうと箸をつける。
「初恋は実らないとお母様は言っていた……」
階段を下りる明日香は、しょんぼりと頭を垂らしていた。
「なにか悪いことしたのかな……」
気持ちを精一杯伝えたつもりだった。他人に、しかも異性に対してこのような行動に出たのは初めてだった。
それを拒否されたことは、明日香にとって、ただただ哀しい出来事である。
彼女は小さな歩幅で家へと向かう。
一度空を見上げたが、その光景は滲んでいて、ちっとも心を晴らしてくれなかった。

平日の真昼に、女子高生が俯いてとぼとぼと歩いている様は、否

が応にも目立つ。買い物帰りの主婦が訝しげに見つめ、散歩中の老人が憂えるように見つめる。
美雪は家にも帰らず、放浪していた。
家には母親がいる。早退の理由なんて適当に作ればいいが、鞄を忘れた状態では怪しまれる。そんなことを考えていると、自然と足は遠のいていた。
「はあ……」
大きく深いため息を一つ。
後悔だった。勢いで告白してしまった後悔だった。
――もっとちゃんとした場所で告白したかったのに……。
もう一度ため息を吐いて、少し顔を上げる。
どこをどう歩いてきたのか分からないが、小さな公園が目の前にあった。
「ここって」
記憶がくすぐられる。この公園は昔、幼稚園生のころに来たことがある。亮一と出掛けている途中で迷子になり、さまよった挙げ句に辿り着いたのがこの公園だった。
懐かしさが込み上げる。
あのとき、亮一が迎えに来てくれた。彼は町中を走り回り、美雪を捜した。
『もうどこにもいくなよ？』
そう言った亮一に、美雪は大きく頷いた。それが彼女の、今も続く初恋の始まりだった。
「美雪！」
亮一はいつもより小さい背中を見つけて、叫んだ。
「亮ちゃん！？」
驚いて振り返った美雪の前で停止し、ぜえぜえと肩を上下させる。
「お前……こんなとこでなにやってんだよ！　家にもいないし……捜したんだぞ！」
「だってこんな時間に帰れないし……亮ちゃんにあんなこと言っち

ゃって、学校も無理だし……」
「だからってこんなとこ歩いてると、補導されるだろ」
呼吸が落ち着いた亮一は、額の汗を袖で拭いながら、美雪越しに公園を見やった。
「それに美雪、昔この辺で迷子になったことあるだろ？　また迷ってたんじゃないのか？」
「……覚えててくれたんだ？」
「ま、まあ……あのあと、俺も怒られたしな」
迷子になった美雪を捜した亮一だったが、彼の親は息子が突然いなくなったと心配して、帰還した彼を怒ったのである。亮一からすれば、あまり格好のいい思い出ではなかった。
「亮ちゃん、怒ってる？」
「え？」
「あたしのせいで、サボらせちゃったし……せっかく時倉さんがお弁当作ってきてくれたのに」
「怒ってないよ。それに、明日香のことはもういいんだ」
「もういいって？」
「俺は彼女の気持ちには応えない」
「応えないって……」
「明日香みたいな子に好きって言われて、正直嬉しかったよ。でも……美雪に言われたときのほうが、嬉しかった」
美雪は口を薄く開いて、目を丸くする。
「えーっと、なんて言えばいいのかな」亮一は視線をうろちょろさせながら、後頭部を掻く。「今更だけど、美雪から先に言ってもらったけど……」
しかし、最後は腕を下ろし、美雪と視線を合わせた。
「好き、だ。たぶん、小さいときから、ずっと」
言い終えたあと、亮一はまたも視線をうろちょろさせ、顔を真っ赤にした。一方の美雪も頬を紅潮させてはいたが、視線は亮一にじっと置いて、大粒の涙をこぼし始める。

「な、なんで泣くんだよ！」
「だって嬉しいからぁ！」
美雪は子供のようにわんわんと泣いた。何事だと、遠くからこちらを見ている奥様たちを見つけた亮一は、美雪の手を引いて、歩き始める。
「学校に戻ろう。鞄も全部忘れてるだろ？」
「う、うん」
二人は手を繋いで歩いていく。
手を繋ぐなんて、いつ以来だろうか。
美雪がぼんやり考えていると、
「美雪」
亮一が振り返った。
「もうどこにも行くなよ？」
「……うん！　ずっと一緒にいる！」

学校へ帰った二人は、とことん先生に怒られた。更にはクラスメイトたちから注目されて、恥ずかしくてたまらず、美雪は最後まで顔を赤くして落ち着きがなかった。
亮一は明日香と話がしたかったが、彼女は早退。
裏サイト上に亮一が逃げたことが書かれてあり、ショックを受けていたと裏切り者の生徒に聞き、最後まで勇作の援護を受けていたと感動しながら、亮一は美雪と共に帰路を辿った。
これまでと違う気持ちでの下校は、二人を終始無言でいさせた。いつもはどうでもいいことまで話すのに、なにを話せばいいのかお互い分からず、結局大した話もせずに美雪の家まで送った亮一は、気疲れを覚えながら自宅へ向かう。
――今日はなんだか疲れたな……。
とは思いつつも、心地の良いむず痒さが全身を這っていた。

――あとで電話して、明日香には謝ろう。
メールで送るのも考えたが、やはり声で伝えたほうがいいと思えた。亮一は昨晩彼女から掛かってきた番号を今更登録し、自宅へと到着する。
鍵を挿して解錠し、ドアを開ける。
「ただい……ま？」
背筋が凍る。
玄関に並ぶ靴は、母親と妹の見慣れた物。そして一足、高校指定の女子用の靴がある。
美雪は亮一がちゃんと送り届けた。彼女ではない。
ならば……。
美雪以外に亮一を訪ねてくる女子生徒は、一人しかいない。
「おかえり亮一！」
リビングから顔を出したのは、まごうことなき明日香である。彼女は長い髪を纏めてポニーテールにして、制服の上にエプロンを着けて、更には右手にフライ返しを持っている。
一見、新妻である。
「な、なんで！？」
亮一は閉まったドアに背をつけた。
「言っただろう！　今日は特製ハンバーグを作ると！」
確かに彼の鼻腔は食欲を増幅させるよい香りに支配されている。
「そういえば昼ご飯食べてないんだよなぁ、っていやいやいや！　そうじゃなくて、俺は……」
「確かにお前は私の気持ちを拒んだ。だが！」
明日香は亮一の言葉を遮ると、フライ返しの先を彼の鼻先に突きつけた。
「それは諦める理由にはならない！　振り向いてくれないなら、力任せに首を捻って私を見てもらう！　お母様もそうやってお父様と恋人になったと言っていた！」
彼女は泣いて帰宅した。そのときまでは諦めるつもりだった。が、

そんな娘を迎えた母親が、このアドバイスを伝えたのである。
「なんて理屈だ……十段跳びだよ」
「十段跳びのなにが悪い！　私の初恋は、私の手で成就させる！覚悟してもらうぞ亮一！」
顔を引き攣らせる亮一。
満面の笑みを浮かべる明日香。
自宅でクッションを抱き締め、悶えている美雪。
三人の初恋は、まだまだ始まったばかりだ。

おしまい

（後書き）

ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3439z/

終・十段跳びのなにが悪い！

2011年12月11日20時46分発行